

慶祥の平和学習

山口 太一

(立命館慶祥中学校・高等学校教諭)

1. はじめに

2013年度年間行事予定表から、「高1 広島・長崎平和研修旅行」が姿を消した。中学校の教育プログラムで、日本と世界・現在と過去の平和の危機を知り、「平和」とは何かを考え、高校3年間で、「平和構築に貢献できる人材」を育成する。それが、本校のめざす生徒像「世界に通用する18歳」につながる。そのような想いで、中高6ヵ年で実施する平和学習プログラムを整備してきた中での悲しい出来事であった。

高校1年次に行われていた「広島・長崎平和研修旅行」は、広島・長崎の悲劇を目の当たりにし、平和の意味と平和の危機を実感するだけでなく、広島・長崎が抱える今日の課題に目を向け未来に平和をつなぐ取り組みとして設定されていた。位置づけとしては、中高の平和学習を接続する役割を果たしてきた実践となる。そのため、「観光旅行ではない広島・長崎平和研修旅行」を研修テーマに据え、半日自主研修では、現地の高校生との平和をテーマにした討論会の実施や、生徒が主体的に対象者を見つけ、現地で「平和」をテーマに取材活動を行った。研修終了後には、フォトエッセイを作成し、広島・長崎で学んだことを広く発信するなど、現地での研修活動も多岐にわたり、高校1年生の研修として、定番化目前のものであった。

しかしその反面、研修の質を維持するため、入念な事前学習が必要であり、事後のまとめとあわせて相当数の授業時数確保が必要であった。今年度の広島・長崎平和研修旅行廃止をめぐる議論の出発点は、授業実施の時間確保を目的にした、大型宿泊行事の精選であった。その背景には、本校における、次のような校内事情がある。2012年度、高校に引き続き、中学にも特進クラスが設置されると、中高6ヵ年を見据えた進路指導の充実が学校全体のミッションとして、より強く要求されるようになった。高校3年次をのぞいて、中高6ヵ年で、5つの研修旅行プログラムを実施していた経緯もあり、議論の末、平和学習の意義に一定の理解が示されたものの、高校1年次では、十分な授業時

数確保による、「落ち着いて学習する雰囲気づくり」が必要という判断から、広島・長崎平和研修旅行の廃止が決定された。

「今、平和を実感できているという感覚が当たり前であり、平和学習は必要なのかという意識が広がりつつある。」「平和学習というと、社会科で扱う内容だと思ひ込み、平和学習が人間の尊厳を学ぶ教育そのものの姿であると理解されていない。」「平和学習の価値が職場で共有化されていない。」「平和学習イコール反戦思想教育という印象があり扱いにくい。」「そもそも平和とは何なのかイメージしにくいいため取り組めない。」

これらは、今年の夏に本校教員向けに実施した、平和学習に関するアンケートに対する回答である。本校の平和学習のカリキュラムにとどまらず、日本の平和学習全体を取り巻く現状と課題について、的確に御指摘をいただいた格好である。これらの回答にもあるように、今日平和学習は、その存在意義について、議論を尽くすべき時を迎えている。本校で起こった、広島・長崎平和研修旅行をめぐる議論が良い例である。本校が、平和学習の存在意義について議論する段階に入っていることは明らかである。以下には、近年本校で実践してきた平和学習の取り組みをいくつか紹介しながら、今後の展望について述べておきたい。平和学習を未来志向でつないでいくために。

2. 中学での取り組み

<例1>【中1 国語教材】

実践：『碑 広島二中全滅の記録』（東京書籍）

担当者：(主)国語科 (副)社会科

時間数：授業8時間 被爆講話2時間

内容：国語教材『碑』を理解する国語の授業を軸に、被爆体験講話など、授業内容を深化させるプログラムを国語科・社会科・当該学年団でサポートし、同時展開した。

(1) 授業前の課題レポートとして、各自で広島と原爆投下についてのレポートを作成した。(2) 被爆

体験講話の前に、社会科の授業を利用して、当時の時代背景について特別授業を実施した。(3) 北海道被爆者協会の「語りべ派遣事業」を利用して、被爆体験講話を実施した。(4) これらを実施しながら、国語の時間では、教材として『碑』を使用した授業を行った。

まとめ：戦争を題材にした国語科教材は多く見られる。また、被爆体験講話を聞くという取り組みも同様である。それらを複合的にあつかうことで、より、戦争の悲惨さに共感できるよう、相乗効果を狙った実践である。2つの教科会議での合意と、学年団の協力を要するため、事前準備では合意形成に苦労もあったが、取り組みの主旨に対して御理解をいただき、実現に至った。授業のまとめとして、「広島二中から慶祥生へのメッセージ」と題して、もしあなたが、作品中の二中の生徒だったら、現代の子どもにどんなメッセージをなげかけるかという課題を設定して作文を作成した。教材の中にいる同世代の子どもたちに、どれだけ共感できているのかをはかるための実践である。添削の結果、歴史的事実をふまえ、広島の悲劇に共感できている様子が見られ、高く評価できる作品が多かった。

<例2> 【中3 社会 長期休暇課題】

実践：『戦争をかたりつぐレポート』

担当者：社会科

時間数：夏季休業中の課題

内容：中学社会科の歴史分野のまとめとして、「アジア・太平洋戦争」についての学習で実施している(中3夏休み課題)。普段は、当時の国際関係を重視し、広い視点で学ぶことの多い戦争の悲劇について、その時代を生きた1人の人間の一生と、戦争にまつわるエピソードを入り口に視点を変えて考える実践である。自分が探した人物をとおして、戦争を捉えなおすことで、過去の戦争と現代を生きる自分の距離を縮めるための取り組みである。具体的には、B4サイズ1枚の用紙に、身のまわりにいる戦争に関わった人物1名探し、取材を行う。または、過去の人物について取り上げる場合は、書籍や資料をもちいて調査し、レポートすることになっている。

まとめ：この実践の興味は、(1)それぞれの生徒が、どのような人物を探し当てレポートするのか、(2) 加害・被害どのような立場をクローズアップするのか、(3) 戦時中の人物と現代を生きる自分をどうリンクさせるかが読み取れるところにある。また、作品を掲示し、鑑賞する時間を設け、仲間との共感が得ら

れることで、学習効果が高まると考えている。

課題に取り組んだ生徒からは、「1人の人物の悲劇を追うことで、戦争で犠牲になった方々全体の数に対する重みがかかった。」「調査をまとめていく中で、戦争の悲劇が自分ごとのように感じられた。」という感想が寄せられた。

【生徒の調査 一部紹介】

- ・祖母(釧路空襲) ・親戚(網走空襲)
- ・祖母(サハリン) ・坪井直さん(広島)
- ・島田叡さん(前沖縄県知事)
- ・伊波園子さん(ひめゆり学徒隊)
- ・大河原孝一さん(戦争加害の歴史)

【道内で従軍していた方への取材レポートより】

調査をすすめていくうちに、自分の目の前で多くの仲間を失ったこと、それが今でも夢にでてくるといってお話が印象深かった。戦争が多く心の傷を残すことを改めて実感した。戦争で、私たちが住む北海道も大きな被害を受けていることを今まで認識していなかったが、今回の調査で多くのことがわかった。この事実を受け止め、忘れぬようにしよう。

<例3> 【中2 美術 製作】

実践：バルサタワー

担当者：美術科

時間数：製作時間 14時間

内容：バルサタワー製作とは、高さ20cmほどのバルサ材に、自分が表現したいデザインをつけ加工する、美術の授業課題のことである。デザインを決める過程で、「コンセプトシート」を作成し、自分のイメージを徐々に具体化していく。バルサタワーの製作では、「平和」をテーマにコンセプトが練り上げられ、「平和」をイメージした多くの作品が誕生している。

このように美術の制作活動をつうじて、平和のイメージを具体化していく作業は、自らが「平和」に歩み寄り、様々な解釈を与えていく工程をとまなうため、自分の中にある「平和像」をとらえなおす機会として意義深い。また、2011年度には、中1美術の鑑賞教材に「無辜の民(本郷新)」が採用されるなど、美術科として芸術と平和の関係性を重視し、授業をとおして平和を考える機会が生徒に提供されている。

さらに、このような美術科の実践は、平和学習の実践が社会科教育の枠を超えて、本校において広がりを見せ始めた先行事例として、大きな意味を持っている。

まとめ：生徒が様々なイメージで「平和」をとらえ、作品化することで、個性豊かな作品が数多く誕生した。バルサタワーは、例年実施している、立命館国際平和ミュージアムの附属校平和教育実践展示の中でも紹介している。美術科の協力により実現した、平和と芸術をテーマにしたバルサタワーの展示は、来館者の方々から、例年高い評価をいただいている。

芸術の成り立ちと「平和」は、切り離して考えられないものであり、美術を出発点に音楽や体育など、まだ平和学習の事例発表の少ない分野についても、今後その可能性を検討してみたい。



バルサタワー（国際平和ミュージアム附属校平和教育実践展示より）

<例4> 【中3 学年実施 討論】

実践：『明日を語ろう～地球市民のつどい～』

担当者：学年教員団 社会科

時間数：事前学習3時間 討論会2時間

内容：2009年度から実施してきた、中学平和学習の象徴的取り組みである。3年間で学んだ社会科学的な知識をもとに、改めて「平和とは何か」を問い、多様性があるとされる、平和の定義に挑戦している。事前学習（3時間）と生徒発表にゲストを交えての討論会（2時間連続）をあわせ、全5時間の実施計画で、例年実践されている。年度によって、生徒が考えるテーマの設定や、参加していただくゲストは異なる。過去には、本校に留学中だった各国の学生8名を交えての「平和」をテーマにしたパネルディスカッションや、地元で活動するミュージシャンを招いてのミニライブ付講演会など、年度によって、様々な工夫がなされてきた。以下に、2012年度に実施した、「第4回明日を語ろう～地球市民のつどい～」の様子をその実施例の1つとして紹介する。

(1) 第4回討論会のゲスト

- ・上野隆三氏（立命館大学文学部）
 - ・西脇佳代氏（JICAセネガル派遣団）
 - ・林千賀子氏（札幌弁護士会）
 - ・箭内 健氏（立命館慶祥社会科教諭）
- ※所属は2012年当時のもの

(2) 実施内容

【実施 1～3時間目】

2週にわたって時間を確保し、中3各クラス（全4クラス）に対して設定した、「平和を考えるための4つのテーマ」についてそれぞれ議論した。（授業4時間目の発表へ向けて）また、例年、テーマの設定については、本プログラムのコーディネーター（過去4回については社会科教員が主に関与した。）が、原案を学年の会議体に提案。学年教員団と協議することで、設定され生徒にリリースされている。

【実施 4・5時間目】

実施4時間目・5時間目は連続で100分（50分授業×2回分）の授業を確保して実施した。前半の1時間は、各教室で設定されたテーマについて、ここまで議論されてきた内容のプレゼンテーションをおこない、当日参加していただいたゲストの方々に、講評をいただいた。後半の1時間は、集会場に場所を移して、学年全体で、ゲストの方々と「平和」をテーマにパネルディスカッションを実施した。



各HRで実施した生徒発表の様子

(3) 4つのテーマ（設定のねらい）

- 1、「緊迫する日中間の領土問題を平和的に解決する方法を考えよう。」（身近な紛争事例を取り上げて平和的解決手段を考える。）
- 2、「世界の平和のために活躍する人がいます。それ

を調べ、あなたができることを考えよう」(紛争の平和的解決の実例を調べることで、『私たちには無理』の思考からの脱却を図る。)

3、「学習してきた戦争の悲劇を振り返り、戦争を防ぐためにはどうすべきだったか考えよう」(過去の戦争を分析し、平和的解決のためにどのような選択肢があるか考える。)

4、「平和憲法を持ち、平和国家を宣言する日本。しかし、日本は平和と言えるか考えよう」

(日本が平和であるかを再検討することで、世界と日本の平和の危機を接合する。)



学年全体で実施したパネルディスカッションの様子

まとめ：社会科・国語科・美術科・道徳科など、本校では、中学の教科教育の中で、「平和」を考える機会が多く設定されている。また、中2で行う京都研修旅行の際には、立命館大学国際平和ミュージアムでの展示の鑑賞や、館長の平和講義をお聞きするなど、その知識を深める機会にも恵まれている。それらの学びをまとめる取り組みとして、この実践は役割を果たしてきている。2012年度の中学生にとっては、この取り組みは、決して簡単ではないテーマ設定での議論になったが、生徒の意見表明の内容は興味深いものばかりだった。また、最終回に様々な立場で、実社会で活躍されているゲストの方々「平和観」や、「平和実践」を聞くことで、今後の学びの動機づけの機会にもなっている。2012年度で4回目の取り組みになるが、このプログラムをとおして考えたことを基礎に、高校では、平和構築を実践するための知識を学ぶだけでなく、世界の課題と向き合う機会において、主体的に行動する生徒も見られるようになった。なお、2014年度、第5回「明日を語ろう」では、自分たちが検討した平和の定義にもとづいて、世界を変えるアイデアを設計する授業計画が準備されている。

【生徒の感想シートより】

平和について、議論を経て自分たちで考え、意見を発表する良い経験ができました。しかし、このように考えることはもちろん大事ですが、より意識しなければならないことは、「行動」です。世界に通用する18歳を意識して、高校ではより具体的に自分たちができることを学んでいきたいです。今日のパネルディスカッションでは、様々な立場のゲストの方々から見た平和の切り口が紹介されました。どれも自分にとっては新鮮で、勉強になりました。特に異文化理解についての討論から、今まで以上にメディアリテラシーを意識し、正しい情報から正しい判断ができるよう、情報伝達の中で誇張や憶測が飛び交っていることに注意しないといけないというお話が印象的でした。平和学習全体を通じて考えたのは、「人生」とは、人として生きるという意味だということです。だれもが人間らしく生きられる世の中の実現へ向けてさらに学んでいこうと思います。

3. 高校での取り組み

<例1> 【高1 学年実施 研修旅行】

実践：広島・長崎平和研修旅行

担当者：学年教員団

内容：実施内容、このプログラムの現状については、すでに紹介している。実施3年目となった2012年には、事前学習として本校を会場に、広島市から坪井直さんをお招きしての講演会や、札幌市にある北星学園大学のご協力で、片岡徹先生をお招きしての平和学特別講義が実現するなど、さらに充実した事前学習プログラムが整備されていた。また、現地取材活動では、NPO、中国新聞社、広島市教育委員会、市内の高校などを取材先として自ら決定し、広島と平和の現状について考えてきた。そのため、例年、生徒が研修終了後に作成しているフォトエッセイ(次頁参照)は、自身の広島・長崎での学びを見事にまとめ、発信する力のある作品ばかりであった。

あの空へ

高校一年H組 稲岡 類



初めて広島を訪れた日、空は雲一つない青空だった。六十六年前のあの朝も、こんな空だったのだろうか。夏真っ盛りのあの日。人々はいつもと変わらない朝を迎えていた。誰しもが何気ない一日の始まりだと思っただろう。そこに落とされたい発の爆弾。この空に大きなきのご雲が現れ、人々の命を一瞬にして焼き尽し、たくさんの夢と希望を奪った。人は何気なく空を見上げる。私も同じだ。私が初めて広島で見上げた空。そこには、あの日の夢や希望があった。今、私たちに求められているものは何か。それは、あの日の広島を学び、後世へと平和への願いを伝える「メッセンジャー」となることだ。命を絶たれた人の夢や希望を後世へと伝える「メッセンジャー」になることだ。私は、平和のメッセンジャーになろう。世界へ、そして、この空へ、平和の願いを届けよう。多くの夢や希望があり、そして、多くの人が眠るあの空へ、私は誓った。

生徒が作成したフォトエッセイ

<例2> 【高2 学年実施 研修旅行】

実践：海外研修旅行（※）

（※）ガラパゴスコース、ベトナムコース、タイコース、マレーシアコース、アメリカコース、オランダ・ベルギーコース、ポーランド・リトアニアコース

担当者：学年教員団

内容：世界を舞台に7つのコースから選択し、各地で設定されたテーマに沿って研修をおこなう。各コースの中でも、ベトナム（戦争学習／枯葉剤リハビリ施設）、ポーランド・リトアニア（アウシュビッツを中心とした平和学習）、タイ（YMCAパヤオセンターでの学習）、オランダ・ベルギー（ドイツ国際平和村での交流／国際司法裁判所見学）などのコースで、平和学習の特色が強くており、現地で訪問する施設での活動や、施設への具体的支援策について議論がなされ、様々な活動が行われてきた。中学段階で獲得した、「戦争がなければ平和とは、言い切れない。」という理解のもと、世界で見られる人間の尊厳にかかわる事態に直面し、私たちに何ができるのかを考え、行動する研修機会となっている。2012年度の取り組みでは、ドイツ国際平和村での研修プログラム（※）を計画した、オランダ・ベルギーコース派遣団が、JR札幌駅前

街頭PR活動を行い、ドイツ国際平和村の活動の理解と、現地施設への支援を訴える活動で成果を残した。（この様子は北海道新聞にも掲載された。）また、札幌UNESCO協会のご協力のもと、帰国後に現地で目の当たりにした事実を映像編集する活動も行っている。具体的には、映像と音声によるナレーションを自ら担当して作品を完成させ、公開している。

（※）【ドイツ国際平和村プログラムについて】

本プログラムでは、現地を訪問しスタッフの方から平和村設置の意義・目的についてレクチャーを受けている。その後、施設内で、紛争被害者として傷つき、現在リハビリ治療を受けている子どもたちと交流した。2012年度研修参加生徒は、「世界の課題に目をむけ、平和について考えて欲しい」という思いから、街頭で同施設のPRを行うとともに、施設の運営資金のカンパを募った。また、同施設で歯ブラシが不足しているという現状を知り、企業20社に物資提供を求める行動をとり、約6千本の歯ブラシを施設に無償提供することに成功した。

まとめ：本研修は、中学段階での実践や、広島・長

崎平和研修旅行をきっかけに、「平和」の定義を考え、それを「戦争がないこと」にとどまらず、広義のものとしてとらえたために、各研修先が抱える課題や、実際に目の当たりにした世界の現状を、平和の危機として受け止められていることを出発点とし、共感する力を原動力に具体的な行動を計画する機会となっている。このような取り組みから、各地で大いに刺激を受け、平和構築に貢献できる人材として必要な知識や技量が身につくことができている。いわば、「世界に通用する18歳」への大きなステップとして、役割を果たしているプログラムである。

<例3> 【高3 選択科目 アジア学】

実践：高3 選択教科

担当者：山口 太一（2012・2013年度）

時間数：年間3単位（50分授業+100分授業）

内容：2012年度に、立命館大学内部進学希望者を対象に設置された、特色教育カリキュラムである。選択受講制になっており、事前に公開しているシラバスをもとに、アジアの現状理解や、社会学や平和学の基礎を学ぶ。過去2年間は、平和構築に貢献できる人材育成のための特化した本プログラムの計画に共感し、興味関心のある生徒が受講している。

講義では、4月から6月までの予定で、平和学や社会学の基礎を学びながら、それらをファンダメンタルとして、社会科学的な視点を身につけることに時間を割いている。また、グループ課題とプレゼンテーションの機会を早期に設定し、発表スキルの育成も視野に入れて準備している。前期終盤へ向けては、実際に教育研究の場で様々な実践を行っている方をゲストに招き、特別講義を行っている。

2013年度は、立命館アジア太平洋大学から淵ノ上英樹先生(平和構築学入門/法の支配をどう考えるか)、井口由布先生(マレーシア/多民族文化国家の構造)、北海道大学大学院から渡邊悌二先生(ネパール・ヒマラヤ地域/中央アジアの自然環境保全)、北星学園大学から野本恵介先生(ベトナム/社会主義体制の理解と今後の展開)、札幌に拠点を置くNGOより、大東利章先生(インド/不可触民、に対する生活再建のための現地支援活動とカーストによる伝統的差別の壁)、により計7回(700分)、各先生方ご自身の研究領域から導き出された問題提起や、それら諸課題への具体的な解決のアプローチについて、実践を踏まえて、特別講義を実施した。

まとめ：生徒にとって本講座は、日ごろ学習している知識を深めるだけではなく、実際に平和構築に何らかの形で貢献している方々と会い、話を聞くことで、平和の課題を自らの課題とし、主体的に行動していくきっかけにもなっている。例えば、後期は、生徒自らがアジアをフィールドに、紛争事例の平和的解決方法、アジア地域における支援のあり方など、平和の危機と感じられる場面について課題設定し、その中で「私ならどのような貢献ができるか」について発表と検討を重ね、年間の講義を終えるよう計画している。ここで検討したことを、大学における「問い」として暖めながら、学問を深めて欲しいと期待している。また、本講座を利用して、本校における新たな平和学習の教材開発を行っている。

4. まとめ

—本校における平和学習の到達点と課題—

以上のように本校では、中高6カ年の様々な場面で、平和学習といえる取り組みを積極的に実践してきた。これら1つ1つの実践については、各担当者の創意工夫により、事後に実施したアンケートにもとづく検証で、どれも高い評価を得ている。例えば、昨年度中学3年生で実施した「第4回 明日を語ろう～地球市民のつどい～」では、参加全生徒対象のアンケートによると、プログラムに対する生徒自身の活動評価で、96%の生徒が「意欲的に本プログラムに取り組めた」と回答している。このように平和学習をテーマにした取り組みが6カ年で体系化されたものとして育った背景には、以下のことが考えられる。

- (1) 特色教育の1つとして学校が推進してきたことで生まれた、平和学習の存在意義。
- (2) 社会科を中心に一部の教員を中心に認識され、守られてきた平和学習の価値。
- (3) 中3で過去実施してきたディスカッションのような、平和学習を象徴する大規模な取り組みの存在。

しかしながら本校における平和学習は、先に示した本校の教員アンケートの回答でも指摘されているように、その存在意義について、改めて価値を示していかなくてはならない段階に直面している。そのことを前向きに課題と自覚しつつ、今後、平和学習の実践を、

本校において継続していくために、以下の点を整備していくべきであると考え。

1つには、中高6カ年の各所で行われているこれら平和学習実践（または、今後設定される新たな実践事例）が、各々設定した目的の上のみ存在するのではなく、中高6カ年教育の実践として、「継続性」・「一貫性」を持ったものとして存在すること。また、その上で、平和学習がもたらす教育的効果を証明すること。2つには、6カ年平和学習の最終的な獲得目標を、現代社会の情勢にてらして、生徒ならびに教員集団が納得できるものに再定義することである。

具体的な方策としては、まず、中高6カ年の各所で行われている取り組みを発達段階に応じた獲得目標ごとに整理し、中高6カ年の平和学習を体系化し、理論付けること。そのために、各プログラムの「評価基準」を明確化する必要がある。あらゆる学習活動において、「ねらいと評価」は一体であるが、平和学習については「多様な解釈が可能」である性格上、評価基準が曖昧にされることも多いのではないだろうか。また、6ヶ年の平和学習の最終的な獲得目標としては、「紛争の平和的解決によって対立を乗り越えるマインドを持ち、平和構築に貢献できる力」とすることが、本校では、現在検討されている。これは、現代の平和学習に対する批判、「平和学習の非現実性・非実用性」に対する挑戦である。以前より、平和学習に対しては、平和の危機を学ぶ機会を提供し、学習者に対して心理的不安を掻き立てはするものの、例えば「戦争体験の聞き取り学習」などでは、学習活動において、「体験者からの聞き取り」を重視し、分析的に戦争を学習するに至らず、「知識獲得」の段階で学習活動を完結することへの批判があった。つまり、結局のところ学習者に対して、戦争は恐ろしいという印象は与えるものの、平和への道筋が、雲をつかむような話になるという批判である。したがって、国際紛争に対する平和的解決というマインドを育み、その実現可能性を追求する平和学習の実践をつみ上げていくべきである。本校でも、紛争に対する平和的解決の知識獲得を、中高6カ年の平和学習の最終獲得目標に据え、多岐にわたってプログラムを準備することで、紛争の平和的解決の可能性を実感し、行動できる人材＝「世界に通用する18歳」が育まれることを検討している。

これらの点を実際に進めていくことについて、幸いなことに本学園では、立命館大学国際平和ミュージアムの研究会のメンバーが、各附属校内で任命されており、各研究委員が、校内で行われる平和学習実践の企

画立案の際に、各担当者と協議する風土が存在している。本校でも、国際平和ミュージアムと連携を密にしながら、研究委員を改革の軸に、校内的な議論を経て、平和学習を取り巻く状況を再整備する計画である。そのことが、本校で平和学習をつないでいくための必須条件である。

広島・長崎平和研修旅行の廃止にもあるように、平和学習を推進してきた本校においても、平和学習の価値（特に戦争体験の聞き取り型学習など旧来から行われてきた実践。）が共有化されていない実態は存在する。だが、「グローバル化」が叫ばれるようになって久しく、本校でもカリキュラムの国際化が進み、グローバル人材の育成が行われている中で、紛争を平和的に解決する資質を持った人材の育成が、今後大きな価値を持つことについては、あえてこの場で説明を加える必要はないだろう。「世界に通用する18歳」とは、世界を知っている18歳をさすものではない。幅広い知識理解をもとに、主体的行動者としてのアクティブなマインドを伴って完成するのである。平和学習による実践がこれからも発展をつづけるよう、教員団で平和学習をとりまく現在の諸課題に向き合っていきたい。